

## 地中海沿岸ラテン系民族の時間観（その1） —— 古代ギリシア人の時間観 ——

麦倉達生

### Zeitbegriff der Romanen am Mittelländischen Meer (No. 1)

—— Zeitbegriff der altertümlichen Griechen ——

Tatuo MUGIKURA

同じくヨーロッパに住む民族でも、ドイツ人をその代表格とするゲルマン系の諸民族（ドイツ人、イギリス人、オランダ人、オーストリア人、スイス人など）と、地中海沿岸のラテン系の諸民族（イタリア人、フランス人、スペイン人、ポルトガル人など）とでは、ともに古代ギリシア・ローマ文明という共通の文化基盤をもち、またキリスト教という共通の宗教世界のうちにありながら、それでも両者のあいだには諸々の点で対照的な相違の見られることは、一般によく知られたところである。そうした相違点のひとつに両民族の時間観がある。エドワード・T・ホールのことばを借りていえば、一方のゲルマン系民族が直線的なモノクロニック・タイム（単一的時間）の時間観であるのに対して、もう一方のラテン系民族は円環的なポリクロニック・タイム（多元的時間）の時間観だといった違いがそれである。前者の代表格としてのドイツ人の直線的な時間観についてはすでに論じたつもりだが、いまそれをより鮮明ならしめるために、ここでさらに後者を代表させる形でイタリア人の時間観を——古代ローマ人（古代イタリア人）にさかのぼって——取りあげてみようと思う。

ところで和辻哲郎の風土論を引きあいにはだすまでもなく、人間生活の万般に、従ってまた当然のことながら各民族の時間観にも、もっとも

大きな影響を及ぼすのは、その民族がおかれていた風土である。風土のちがいによって、いのちの糧をえる手段も採集、狩猟、漁労、牧畜、農耕等とちがってきて、そしてそれとのかかわりから、時間に対する観方もおのずと異ってくることになるからである。そのような観点に立つてまずはじめに、地中海沿岸のラテン系諸民族の時間観の形成にとっても決定的な影響を及ぼしたその気候風土を、つまり地中海地域に共通する一様で同質的な気候風土を取り上げて確認しておきたい。つづいて、古代ギリシア人の時間観をもみておかねばならない。なぜならギリシア人は、民族的にはラテン系ではないのだが、古代のある時期に活発な植民活動を行って、主として南イタリアのあちこちに植民市をつくって定住し、古代ローマ人・ラテン系民族ともかかわりをもつことを通して、時間観の点でも影響を与えていったからである。つづいて次には、古代ローマ帝国のもつ意味を検討する必要があるだろう。この帝国にあっては、「すべての道はローマに通ず」るのであったが、時間観の点でもまた、すべての時間観はまずローマに通じ、そうしてそのローマから帝国内のすべての国・民族へと伝わり拡まっていったと考えられるからである。たとえば、392年にテオドシウス帝がキリスト教をローマの国教とすることによって、この信仰と不離一体の関係にあ

る例の救済史的な直線的時間観が、ローマ帝国内のラテン系民族はいうにおよばず、そのご全ヨーロッパの諸民族をながくおおいづくすに到ったことなどは、その最も顕著な一例である。このキリスト教信仰にもとづく時間観はしかしながら、そのごの機械時計の出現によって、そと目には同じく直線的な時間観が継承されるかに見えながらも、次第に神の時間（信仰にかかわる聖なる時）から人間の時間（計測可能な俗なる時）へとその内実を変えられていって、やがてはイタリア・ルネッサンスへとつながってゆくことになる。それはある意味では、神の（時の）支配からの人間の（時の）解放ともいえるのだが、人間の（時の）ほうが次第に前面に出てくるこの傾向・過程は、そのご時代がすすむにつれてますますあらわになりつつ現在にいたっている。ただし時間観というものは、その民族にいったん生成・定着したあとは決して消え去ることがないとの特性を持つがゆえに、長い歴史過程を経ながらも地中海沿岸のラテン系民族にあっては、円環的な時間観を基底とするポリクロニック（多元的）な時間観が、なお脈々と息づき続けているとってよいであろう。

### 地中海の風土

夏にイタリアやギリシア、あるいはその他の地中海沿岸の諸国を旅行したことのある人ならきっと、手をかざせばその手が青く染まってしまういそうなまでに真っ青に晴れわたったあの空と、そしてまたあの海の何ともいえない独特の青さとが、忘れがたく心に残ることだろう。それにまた、一年をとおして水の流れている河川になじんでいるわれわれ（日本人）の目には、まったく水の流れていない、からからに干あがった石ころきりの川というのは、何とも奇異な光景である。夏の暑さの点でなら日本人としてさして驚かないが、バスの運転手にしろタクシーの運転手にしろ、時折ちびちびとストローで水を補給していなければ脱水症状になってしまう乾燥しきった夏の気候には、前もって聞き及んではいても、ああこれが夏の地中海の風候なのかと、いまさらのごとくに鮮烈な印象を受ける。ところが逆に冬には、かなり長期にわ

たって、しかも随分と烈しく雨が降るといふ。アフリカなどが乾期と雨期との対極に明瞭に二分される土地だといったことはわれわれなどにも比較的よく知られているが、地中海の気候風土もまた、大まかにいって、夏場の乾期と冬場（正確には秋分から春分にかけて）の雨期という二つの対極に分かれるのである。日本のようにはっきりと春夏秋冬の四季のめぐりがあり、かつまた梅雨どきにはいささか雨がちの日が多くなるとはいえ、一年を通じて青い空と適度の雨に恵まれる国の者から見ると、この乾期と雨期という対極間の二折れのくりかえしによる一年のめぐりは、正直いってやはりいささかなじみがたい。しかしそうした日本人的な思いをいったん横において考えてみるなら、日本のような気候風土の国のほうが実ははるかに稀で、世界全体ではむしろ、夏場と冬場、あるいは乾期と雨期とが二折的な交替をくりかえしながら、一年の周期がかたちづくられてゆく国のほうがずっと多いのではあるまいか。……ということで以下にまずは地中海地域の気候風土を、主としてブローデルの記述<sup>1)</sup>によりながら略述してみよう。

地中海の気候風土についてブローデルは、大づかみに次のように述べている。……「地中海世界をまとめている基本的要素はその風土である。海の端から端までどこをとっても似たような景観や生活様式に統一性を与えている、きわめて特殊な風土である。事実その風土は局地的な自然条件にはほとんど影響されず、外部から、西は大西洋の息吹き、南はサハラ破漠の息吹きという二重の息吹きによって創りあげられたものであった。…毎年夏になると、サハラ砂漠の乾燥した灼熱の空気が海面全体を覆いつくし、その先端は北の方に大きくはみ出す。その灼熱の空気が地中海地域の上にあのように清澄な《栄光の空》、あの光の天球と星をちりばめた夜を創り出している。…六ヶ月の間サハラ砂漠のなすがままになる地中海地域は観光客や水上スポーツの天国で、浜には人々が溢れ、青く静かな、太陽に照りはえる水の天国となる。しかしそうになると動植物や乾ききった大地は雨を待ち望みながら生きてゆくことになる。水はきわ

めて稀少となり、宝の中の宝となる。四月から九月にかけて吹く北東の卓越風、ギリシアのエテジアン（北風）もサハラ砂漠のこの灼熱の竈<sup>かまど</sup>をいささかも冷してくれず、効果的な湿気をもたらしてもくれない。

大西洋がそこへ割り込んできた時に砂漠が身を引く。湿気をたっぷり含んだ低気圧が西から東へと列をなして進行を開始する。風があらゆる方角からこの低気圧に襲いかかり、前に押しやり、オリエントの方向に駈り立てる。海は暗く、バルチック海のように灰色がかかった色調を帯びるか、白く泡立つ波頭に呑み込まれ、雪で覆われたようになる。そして嵐が——恐るべき嵐が猛威を振う。…何ヶ月も干上っていた川に水が溢れ、ルーション地方あるいはミティジャ平野、トスカナ地方、アンダルーシア地方あるいはサロニカの平原では川がしばしば突然氾濫することがある。…これらの雨はしかし恵み深い雨なのだ。アリストパネスに出てくる農夫たちは雨に大喜びし、おしゃべりしながら酒を汲みかわす。というもゼウスが土砂降りの雨で大地を肥沃にしている間、外ではもう何もできないからである。本格的な仕事が再開されるのはようやく春の最後の驟雨とともにヒヤシンスや砂百合が芽吹き、燕が帰ってきた時である。燕がやってくると、季節の扉が蝶番をきまして回転する。要するに一風変わった気候で、植物の育成には向いていない。冬の間雨は降りすぎるほどに降るが、寒さが植物の育成を止めてしまう。暑さが戻ってきたときにはもはや水はない。…アンダルーシア地方では麦の収穫があれほど早く、もう四月にもなるとすぐに行なわれるのは、麦が環境に適應していて急いで種を実らせるからである。」<sup>2)</sup>

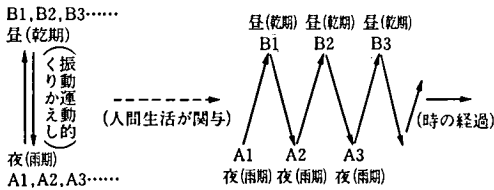
ここに述べられているのは、主として現在の地中海地域の気候風土についてである。がしかしそれは古代ローマ帝国の時代にも、古代ギリシア文明の時代にも、いやさらにさかのぼったはるかな昔にも、変ることなく連綿と繰り返されてきたところのものである。そしてこのような乾期と雨期との二折的な交替のくりかえしという「きわめて特殊な風土」が地中海沿岸国の人びとの物の見方・考え方に対して、したがってまた当然のことながら彼らの「時にたい

する観方」においても、大きな影響を及ぼさぬはずはない。つまり彼らが、こうした乾期と雨期という対極間の反復的くりかえしとしての気候風土をいかんともしがたいものとして受け容れてゆくとき、彼らの時にたいする原初的な観方としては、時とは対極間の反復的なくりかえしだ、と思いなすものになったと見なして、まず間違いないのではあるまいか。

一年における時の動きをこのようにくりかえしとみる原初的で基本的・基層的な観方が出来あがってゆくとき、そうした目であらためてまわりの自然界を見てみるなら、そこではいたるところにこのくりかえしのリズムが見出されることに気付かされたにちがいない。日の出と日の入りによる昼と夜のくりかえし、ひと月ごとの月の満ち欠け、それにとまなう潮の干満、冬至と夏至、そのほか年々歳々くりかえされる自然界での諸々の現象と営みのうちにこのくりかえしを見出し、くりかえしとしての時の動きを感得していったことだろう。いや、このような昼と夜、月の満ち欠け、潮の干満などといった日々身近にみられるくりかえしと、乾期と雨期という一年周期のくりかえしとのあいだに、その気づきのあとさきを云々するなどは、例の鶏と卵との先後を云々するに等しい。要は、地中海沿岸地域の人びとにとってのもっとも原初的で基層的な時間観なるものは、「時とは対極間の反復的なくりかえし」だと見なすものであったろうと考えて間違いないまい、ということである。

ただし、こうした昼と夜、月の満ち欠け、夏と冬（夏至と冬至）、乾期と雨期等々といった自然界の諸現象におけるくりかえしそのものは、たしかに対極間を行きつもどりつ振動することの連続にすぎぬものではあるが、しかしそこに人間の生活がかかわってくるときには、昨日の一昼夜と今日の一昼夜との内実はおのずと異ってくる。同様に先のひと月と今のひと月、昨年と冬（乾期と雨期）と今年のその内実もおのずと異ったものとなるはずだ。つまり、単なるくりかえしにすぎぬ自然界の時のリズムに人間の生活の営みが関与してくるとき、まったく同じことの反復にすぎなかった時間は、その内実においてそれなりに差異あるものとして

——昨日の一昼夜は今日の一昼夜と、そして明日の一昼夜とも異なるものになる、というふうに——他とそれなりの距離をとりながらそれ自身の独自性をもつようになる。別言すれば、それまでの単なる振動運動的なくりかえしとしての時が、ジグザグ運動として時間の経過をとまなうものになるということである。これを図示すれば次のようである。



ともかく、自然界の諸現象に見られるくりかえしを経験することから、時間とは振動運動的にくりかえすものだとする「くりかえしとしての時間」観が、ないしは、そこに人間生活が関与することで、時間とはジグザグ運動において経過してゆくものだとする「ジグザグ運動としての時間」観が、地中海沿岸地域の諸民族にとっての原初的で基層的な時間観になった、と考えてよいのではあるまいか。

ところでしかしながら人間は、自然界の気候風土にただ黙って耐えているのみの生き物ではない。この気候にあってもなお生育する植生を見い出したり、あるいは何らかの手だてを構じ利用する形でこの気候をのりきっていかこうとする。——先ほど見たように、地中海性気候にあっては雨は冬期に（より正確に言えば主に秋と春に）降る。これは大まかに言って、モンスーン型の気候の逆である。日本もこのモンスーン型の気候に入るが、そこでは暑さと水の出会いによって、水稻耕作による稔りが約束される。ところが地中海の気候はこの重要な生命の要素を分離させる。つまり、雨の降るときは気温が低い。（といってももちろんドイツの冬のように寒冷ではない。）逆に気温が高いときは乾燥のためにどんな植物の成長も止まる。そうであれば、まずは低い温度をのりきれる「冬の植物」としての麦（大麦・小麦等）が見つけられ、それが穀物栽培の中心とされるようにな

る。<sup>3)</sup> また「環境に適応して急いで種を実らせる」品種が見出されたり作られたりしてゆく一方で、乾期にぶつからぬよう5月から6月になると急いで刈り入れが行なわれることにもなる。引用文中にもあったように、スペインのアンダルシア地方などでは、4月になるともう刈り入れが行なわれるのである。なおついでながら学問的な分類では、地中海沿岸地域は「準乾燥地帯」に属し、そしてコムギを基準にすれば、「秋播・夏期乾燥型」に入るとのこと。

他方、うちつづく酷暑に何もかもが干上がる夏季の乾燥にたいしては、何よりも灌漑による水利用が古くから考えられてきた。さまざまな方法による灌漑は、もとはオリエントからやってきたものであるが、それは乾期にたいする必要不可欠な対策として地中海地域に早い時期から浸透していった。今日《灌漑技術》の北限は地中海性気候の北限であることがはっきり見てとれるのも、ほかならぬこの乾期対策のためである。ちなみに、前9世紀のホーマーの詩の中に、灌漑についての記載が見られるが、そこでの灌漑はブドウなどの園地に限られ、穀作を主とする畑地には及んでいないという。がともかく、ホーマーの時代すでに灌漑が行なわれていたことは明らかで、それがやがて畑地にも及んでいったろうことは、プラトンの水についての論説からも知れる。<sup>4)</sup>

一方また、冬場に降りすぎる雨のためできる湿地に対しては、排水工事・干拓事業が行われる。それは同時にマラリア対策でもあったのだが、そのようにして湿地が平野となり、さらには耕地となって、さきの灌漑工事とあいまって農業文明を確立してゆく道が準備されてゆくのである。ともかく乾期における水が「室の中の室」、いかに大切なものだったかということは、今日になお残るあのローマ水道の遺構をみただけでも想像にかたくないが、いっぽう過剰にすぎた雨期の水に対する対策もまた裏腹の関係において同様に必要不可欠なものだったわけである。

乾期ないし乾燥にたいしては、灌漑などの水利技術のほかに、乾燥につよい植物（もちろん人間の食生活に役立つ植物）を導入することがまた一つの方策として考えられる。そのような

わけで、灌漑がオリエントからもたらされたのと同様に、紀元前1000年には、乾燥地帯に適応した数多くの植物（草本植物であれ灌木性であれ）がやって来た。つまり、地中海の東から西に向かって、オリーブの木（かんかん照りの乾ききった大気のなか石ころだらけの大地に根をはって生えているその姿を見ていると、ああこれが地中海気候というものなのか、との思いを抱かされるあの木）とぶどうの木の栽培の大規模な移動が行われたのだ。<sup>5)</sup>そしてまた追ってイチジク、オレンジ、レモンなどが定着してゆき、今日地中海沿岸地域のいたるところで、オリーブ、オレンジ、レモンなどの生えた石灰岩の丘、麦畑とぶどう園といった風景が見られることになったのである。

それから今日では、地中海地域のそこかしこで牧場ないし放牧風景も見られるのではあるが、しかし地中海沿岸の雨量の少ない気候風土が本来牧草の生育に必ずしも適したものでないことは、容易に推測のつくところであろう。すなわち、この風土の結果として、（ブロードルによると）地中海地域には本物の牧草が稀であるということだ。だから逆に牧畜の可能な地域はかなりかぎられていて、例えば（農耕にとってもきわめて有用な）牛が大挙して見られるのは、もっぱらエジプト、湿度の多いバルカン半島、地中海の北側の周辺地域、あるいは他の地域よりも雨が深い高地ということになる。山羊と羊（羊は食肉用というよりも羊毛用に飼育される）は、肉の食糧補給の不足を埋め合わせてはいない、とのことである。〔なおこのような気候風土のゆえに、地中海地域に特徴的に見られることになる「移牧」については後述する。〕

なおまたついでながら、乾期と雨期とが明瞭にわかれるこうした「地中海式気候」の世界にあっては、戦争そのほか諸々の行為や活動までもが、これに大きく影響されてきた。すなわち、古代ギリシア、古代ローマの時代から、地上戦、ガレー船による戦争、海賊の襲撃、農村での山賊行為などあらゆる形の戦争が、夏期の到来とともに始ったのであり、そして秋の嵐の始まりをもって終るというふうであった。地中海にあっては、7月と8月の海はほんとうに油を流したように穏やかである。小舟でさえ沖合いに

出られるし、海上のガレー船は心配事もなく港から港へと思いきって航行できる。夏の三ヶ月は海上輸送にとってのみならず、海賊にとっても、また戦争にとっても、絶好の季節なのである。それに対して冬の三ヶ月は、逆説的な意味で、穏やかで平和な時期となる。国家間の戦争は休止となり、小さな戦争もいくつかの緊急の事態を除けば休みである。緊急事態が生じるのは、海でも陸でも、悪天候の季節は不意打ちには好都合だからである。そんなわけで、古代ローマ帝国建設にむけての時代にあっても、三月が戦争開始の月とされていたし、他方十月は戦争の季節の終る月だとして、戦士たちは帰還したのであった。

### 地中海の風土と時間観

それはさて、乾期と雨期との交互のくりかえしという「きわめて特殊な風土」のうちにある地中海沿岸諸国の人びとにとっては、「時とはくりかえすもの」というのが原初的で基本的・基層的な時間観になったと考えて間違いなからう、ということについては先に述べた。しかるにこうした風土のうちにあつて、よりよく生きてゆかんとするために「冬の植物」としての麦が、また乾期に適したものとしてオリーブの木やぶどうの木などが導入される一方で、灌漑・排水などの水利技術の進歩によって次第に自然環境が克服されてゆくとき、そこからやがて地中海沿岸のさまざまな地域で、同じような農業文明が確立されてゆくこととなる。そうなれば、その農業文明に相応した時間観があらたに生まれ育ってやがて定着してゆくのもこれまた自然な成りゆきというものであろう。農業（農作業）はいまの場合、10月に大麦の種を播き、12月に小麦を播き、早いところでは4月に、一般的には5月か6月に刈り入れる。いっぽうぶどうやオリーブは、春に芽吹くなり開花するなりして、夏をこえて9月にはぶどう摘み、秋にはオリーブの収穫をむかえる。（これに夏に実をつけるイチジクを加えてもよい。）こんなふうな農作業は、全体として一年をめぐる周期において営まれる。だから農耕にかかわる時間観（時間意識）が一般的に言っても一年を周期とする

円環的な時間観になるように、地中海地域の農業文明(国)においても、時間観としては同様にまた一年周期の円環的なものとなるのである。

それは言ってみれば、乾期と雨期との交互のくりかえし運動にすぎなかった二折れの(いわば中味のないぺしゃんこの)時間観のなかへ、諸々の農作業という中味がはめこまれてゆくことにより、その二折れが次第に内側からふくらんできて、そのためそれまでは単に行きつ戻りつにすぎなかった時間の動きが、このまるくふくらんできた円環にそって円周運動をなす形でめぐりだすようになる、とでも言うてよいものかも知れない。そしてこうした円環的な時間観がやがて次第にたしかなものになって定着しはじめると、その観方がまた他にもおよんでくるのはごく自然なことであろう。たとえば、これまで交互のくりかえしと見られていた昼と夜もこんどは、朝の日の出とともに昇りはじめた太陽がまるく孤をえがきながら中天に昇って昼となり、そこからまた孤をえがいて地平線あるいは水平線へと没していった夕となり夜となる、といった工合に一日の時の移ろいが朝・昼・夕・夜の円環的なめぐりにおいて把えられるようになる。ひと月周期の月の満ち欠けにおいてもまた同様であろう。こうしたひと月周期の月の満ち欠けをひとつの目安としながら(太陰暦)、春・夏・秋・冬(春分・夏至・秋分・冬至)の一年周期の太陽のめぐり(太陽暦)によって農耕が営まれてゆくことで円環的な時間観(時間意識)が形成・確立されてゆくとき、ごく大雑把に言って、この円環的な時間観はさらには二つの方向をとることになると考えられる。ひとつは、この円環的な時間の動きはただもう同じところをぐるぐると果てることなく永遠にめぐるだけと見なすもの、もうひとつは、この円環的な時間は一年周期でめぐりながらも、その環が数珠つなぎにつらなりつつ、(あるいは螺旋的につらなりつつ、)時間の動きとしては過去から未来に向かって進んでゆくと見なすものである。前者の観方を発展させてゆくと、時間とは永劫回帰的にぐるぐるめぐるもの循環するものとなるが、(これまた大雑把に言って、)古代ギリシア人の時間観は基本的にはこうしたものだったと考えられている。それに対

して古代ローマ人(そしてその流れをくむラテン系民族にあって)は、後者の時間観に依拠したと考えられそうだ。そうしたことについては後にもう少し詳しく見てゆくことにしようと思うが、前者後者いづれにせよ、ともかく円環的な時間観たることに変りはない。そしてこの円環的な時間観とは「場的な時間観」であって、それはとりもなおさず、この「場」のなかに他の諸々の時間観をも受けとめ受け容れることができる特性をもつというに他ならない。こうした「場的な時間観」が古代に確立したことにおいて、地中海沿岸のラテン系民族の時間観がポリクロニック(多元的)なものとなる基礎が出来あがったのであった。そしてこの円環的時間観はほかならぬ地中海地域の風土のなかから、つまり、この自然への人間のかかわりないし働きかけのなかから農業文明が確立していったことを基盤として、生まれ育ち形成され定着していったものなのである。それは同じヨーロッパであってもゲルマン人たちが、半年が冬という寒冷の地(風土)に住むことになったがゆえに、いのちの糧を主として狩猟にたより、そこから牧畜民族化してゆくことによって直線的时间観を発達させていったのとは、まさに好対照をなす。人間の時間意識に対しても風土がいかに大きな影響をおよぼすかということ、改めて思い知らされる次第である。

ただしここで筆者として強調しておきたいのは、円環的時間観が形成・確立されていったからといって、それまでの「くりかえしとしての時間」観が、ないし「ジグザグ運動としての時間」観がこれに吸収合併されるとか融合して消滅していってしまうと見なしてはならないということである。繰り返しになるが、時間観なるものはいったん生成し定着したあとは決して消えることなく存続しつづけるとの特性をもっているということであって、したがって今の場合も、原初的で基層的な「くりかえしとしての時間」観・「ジグザグ運動としての時間」観と、あらたに確立した円環的時間観とがともどもに同時並行的に存在するということなのだ。ことばを換えていえば、円環的時間観が場的なものであるがゆえに、その「場」のうちにこの「くりかえしとしての時間」観がまた同時に併存し

ていると見なすことは可能であっても、それは決して円環的時間観（＝「場」）のなかに包摂されているなどに見なされてはならないということだ。なおまた、地中海地域に農業文明が確立されてゆく過程において、地域的なかたよりとかばらつきはあるにしろ、牧畜もまた（とりわけ「移牧」という形で）同時に営まれていったのであってみれば、これにともなう直線的時間観もまた同時並行的に定着していったのであった。〔牧畜にともなうこの直線的时间観に関しては、紀元前2000年にはじまった印欧（祖）語人種（本来的に遊牧ないし牧畜民族）の地中海地域への移動・移住の段階ですでもたらされていたものと考えることができる。地中海地域に特徴的な「移牧」は、牧畜のこの地域での一様式にすぎない。〕ともかくこのように、くりかえしとしての時間観、円環的時間観、そして直線的时间観の三つの時間観が、同時並行的に存在していたことにおいて、すでに古代（の農業文明の時代）にあっては、地中海沿岸のラテン系民族の時間観が多元的なものとなる基礎はできあがっていたと解し得る。

### 古代ギリシア人の時間観

地中海沿岸ラテン系民族の時間観を明らかにしてゆくためには、それに先だって古代ギリシア人の時間観を見ておく必要がある。なぜなら、古代のある時間（紀元前8世紀半ば）からギリシア人たちが植民活動にのりだし、主として南イタリアの海岸ぞいおよびシケリア島（シチリア）に多くの植民市をつくって定住することで、彼らの時間観が古代ローマ人、古代イタリア人、さらには地中海沿岸のラテン系民族のなかにも入り拡まっていったと考えられるからである。

さてところで、ギリシアももちろん地中海気候の圏内にあったのだから、古代のギリシア人であってもその原初的で基層的な時間観は、「時間とは振動運動的にくりかえすもの」ないしは「時間とはジグザグ運動によって経過してゆくもの」と見なすものであったろうし、その後の農業文明の確立にともなって、新たに円環的時間観が成立・定着していったろうことも間

違いないところであろう。ところが、古代ギリシア人にとってのこの円環的な時間は、永劫回帰的に循環するものと一般にみなされている。例えばクルマンは、『キリストと時』のなかで次のように述べている。「ギリシャ的な考えにあっては、時間が、始めと終りをもった上昇する線ではなく、円環として考えられている。時間は、永遠の環をえがいて運動し、すべてのものが回帰する。その故に、ギリシャの哲学的思想は、時間の問題の解決に苦慮している。その故に、またすべてのギリシャ的な救済の努力も、この永遠の円環運動から解放されることに向けられているのである。…ヘレニズムにおいて存在する救いとは、我々が時間の円環的運行に束縛せられた此岸の存在から、時間を脱却した、常に自由に到達しうる彼岸へと移されることのみである。」<sup>6)</sup> このクルマンの指摘に見られるように、古代ギリシア人にとって、時間は円環として、しかも永遠の環をえがいて運動するものとして考えられている。つまり時間とは永遠の円環運動だ、と見なすところの永劫回帰としての円環的時間観だったのである。

エリアーデもまた、古代ギリシア人の時間観が、時間とは永遠の円環運動・循環運動だと見なすものであったとする観方を、次のように肯っている。「ギリシャ人もまた永遠回帰の神話を知っていた。そして後代の哲学者たちは、循環する時の概念をますます拡大していった。H・Ch・ピュエシュがみごとに纏めているところを次に引用しよう。《有名なプラトンの定義によれば、天体の運行によって規定され、測量される時間は、不動の永遠性の動く影像であり、その循環運動において不動の永遠性を模倣する。したがって宇宙全体の生成と、同じくこのわれわれの生滅の世界の持続時間とは円環をなして、すなわち限りない循環の継続において形成され、この循環の中で同一の現実が一定不変の法則にしたがって生じては滅し、またまた生成することになるであろう。同一量の存在が少しの増減もなくその内に含まれるばかりでなく、古代末期の或る思想家たち——ピタゴラス派、ストア派、プラトン派の人びと——はこれらの循環周期、すなわちアイオネスとアエウァのどの一つをとってもその内部において、すで

に以前の諸周期に存在し、かつまた以後の諸周期に再び存在するであろうと同一の状況が回帰するとさえ考えた。一回きりしか起こらない独立の事件というものはなく（たとえばソクラテスの有罪判決と死）、それはすでに起こったことであり、また将来も永久に起こるのである。同一個人が過去にも現われ、現在も現われ、将来もまた周期の回帰するたびごとにそのなかに現われるであろう。宇宙時間は反復であり、循環、永遠回帰である。》<sup>7)</sup>

三宅剛一もその著『時間論』のなかで、古代のギリシア哲学（者たち）において時間が回帰するものと考えられたことは明らかだとしている。もっともギリシア哲学における時間は、本来的には宇宙的なスケールで考えられた時間であるのだが、人間の歴史の時間もまたそうした宇宙的な時間のなかに含まれる。つまりそのことにおいて、人間の歴史の時間もまた、宇宙過程が回帰するごとくに、回帰するものと考えられたとする。

真木悠介は、『時間の比較社会学』のなかで、ヘレニズムにおいて時間を循環するものとしてとらえる考え方は一般的であったことを認めながらも、そうした「円環する」時間のイメージは、ギリシア民族に「生得的」に固有のものというようなものでなく、ギリシア文明のある歴史的な発展の局面において発生してきたものだと指摘する。そして、それならそれはどのような局面においてであったかと問うて、オルフェウス教の生死観がヘレニズム文明のロゴスと出会った時に生まれてきたとしている。つまり次のように言う。「事実ピュタゴラスやエンペドクレスの、そしておそらくは他の人びとの、円環する時間のイメージがオルフェウス教の影響をうけていることはあきらかであろう。けれどもよく考えてみるとオルフェウス教のいう「輪廻転生」は、この人生の終ったあとで靈魂が肉体をはなれ、ひとまずハーデースの冥府に下って審判をうけ、生前の善行悪業に応じてふたたびべつの人間や動物の肉体のうちに宿るというものであるから、時間の円周性とはいちおう別のものである。…オルフェウス教自体はむしろ、固有の意味でのヘレニズム文明以前の、農耕共同体の時間感覚を基礎としている。この時間感

覚が、ヘレニズム文明世界の客体化し数量化する、したがってまた抽象的に無限化してゆくロゴスと出会った時に、その交叉するところに必然に生まれてくるのが、円環としての時間のイメージであったのではないか。円形はギリシアの人間が無限を表象するときの形式であった。はるかな原始共同体にまで通底するオルフェウス教の生死の反復する感覚が、教量化するロゴスによって対象化されたときの形象が、ヘレニズム的な時間の円環であったはずである。」<sup>8)</sup> 真木氏の言うように、ギリシア人の円環的時間観の形成にオルフェウス教の影響があったろうことは大いに認めうる。しかしそうした影響を考慮に入れずとも、ギリシア人における円環的な時間観の形成・定着はごく自然なものとして考えられ得る。なぜなら、オルフェウス教の時間感覚は「農耕共同体に固有の時間感覚を基礎」とするものであるが、その農耕における時間（観）とは、植物ないし穀粒の生死の反復に季節のめぐりが重ね合わされることによって、時間とは反復的に循環するものと観られてゆくところのものである。そして、そうした農耕共同体の時間感覚を基礎とするオルフェウス教が古代ギリシア人に影響を与えたということは、それはとりもなおさず、その時代には古代ギリシア社会においても、それを受容する素地がすでに出来あがっていたということに他ならないのだ。つまり、古代ギリシアにおいても農業文明が定着・確立しつつあったということに他ならず、そして農業文明が確立してゆけば、先にも述べたように、そこからおのずと円環的な時間観も生成、定着、確立してゆくことになるからである。

ともかく古代ギリシア（人）にあっては、農業文明の確立にもとずいて——そのさい、オルフェウス教の影響があったにせよ——円環的時間観が一般的になっていったのだが、それならなぜ彼らにあっては、この円環運動としての時間が永劫回帰的なものと見なされることになったのであろうか。……このことに関しては、筆者としてはギリシア人の哲学好みの特性と、彼らが海洋民族であったことが、その大きな要因をなしているのではないかと考える。

## 古代ギリシア人の哲学好みの特性と海洋民族性

言うまでもなく「哲学」ということばは、ギリシア語の *philosophia* による。そして「ギリシア哲学」ということばはあっても、ローマ哲学などという表現はない。ギリシアとイタリアとは同じ地中海気候の圏内にあって隣りあい、かつ共に農業文明を基礎にして古代において栄えた国でありながら、前者では哲学が大いなる発展をみせたのに対し、後者では哲学は発達せず、より実際的な方面（たとえば建築や土木工事など）において偉業をなしてあげている。あえて言うなら、古代ギリシア人は哲学的な民族、古代イタリア人は実際の・現実的な民族ということになるでもあろうか。こうしたギリシア人の哲学好みがいったいどこに起因するのかといった詮索はさておき、いま彼らが「時間」というものを哲学的に考えてゆくことになるとしたら、どのような迫り方をするであろうか。

ごく一般的にいっても、時代を古くさかのぼればさかのぼるほど人間の意識は、不可視な時の流れなどよりも、まずは可視的な空間に向けられることだろう。あるいは時の移ろいといったものも、空間のうちにみられる可視的な変化・移動・運動においてこそ意識されると言いなおしてよいかも知れない。そうした空間のなかでの動きとしては、なによりもまず太陽の移動・運行がある。これによって昼と夜とのくりかえしが生じるのであり、あるいは朝・昼・夕・夜といった一日のめぐりが意識にのぼる。次には月の出、月の入り、あるいは一月ごとの月の満ち欠けが、そうしてさらには昼のもっとも長いときと短いときによる夏至・冬至といったことが、そして春・夏・秋・冬の四季のめぐりによる一年の移ろいが、まわりの自然界の変化と共に意識されるようになるだろう。そのようにして、まわりの自然・空間への視覚的意識を拡大してゆけば、ごく自然なこととして、やがては宇宙全体にみられる天体の運行が、意識と考察（あえていえば哲学的考察）の対象とならざるをえない。そうすると、その天体（具体的にいえば星々ないし星座）の運行は一年を周期として天空（夜空）をぐるりとひとめぐり

しながら、年々寸分のくるいもなく永遠にくりかえされているものだということが、いやおうなく意識される。そしてその際、これらの星座の円周的な永遠の移ろいは、おそらくはその背後にある永遠不動なるもの（「不動の永遠性」、無時間ないし超時間）の可視的な影像なのでもあろう、といったふうに古代ギリシア人は思いなしたもののようだ。それはともかく、時代の推移とともにやがて時間に対する意識が次第に重要視されてくるとき、それがこうした空間にみられる天体の円周的運行に依拠しながら形成されてゆくのは、ごく自然なことであろう。それにまた民族特性として哲学的な思考を好む古代ギリシア人が「時間」なるものを哲学的に考えていったとしたら、その思考は当然、人間生活から人間をとりまく自然界へ、さらには宇宙全体へと拡大されていって、宇宙規模においてなされるのも、これまたごく自然なことであろう。そして「時間」についての哲学的考察を宇宙規模においておしすすめてゆけば、すでに宇宙をめぐる天体の運行（移ろい）が空間的には円（環）をなして永遠にめぐるものであることを見てとっているのだから、そのことから時間（時の移ろい）もまた同じように円（環）をなして永遠にめぐるもの、つまり時間とは永遠の円環運動だとみるところのギリシア人の永劫回帰的な円環的時間観が形成されることになるのも、これまたごく自然な成りゆきといえないであろうか。

こうしたことと大いにかかわってくるのだが、古代ギリシア人が果てしなくめぐる円環運動としての時間観を持つにいたったもう一つの要因として、彼らが地中海沿岸の諸民族のうちでもとりわけ海との結びつきのつよい海洋民族だったことが考えられる。ペロポネソス半島とバルカン半島、そして対岸のイオニアとによってかこまれたエーゲ海と、そこに点在する無数の島嶼、それが古代のエーゲ文明、ギリシア文明を開花させた世界である。こうした地理世界では、交通にあっては陸路によるよりも陸地ぞいの海路によるほうがはるかに便利で安全な場合が多いし、また島から島への往き来は船にたよらざるをえない。日中にしかも一日の航海で行ける

距離だとまわりの景色や太陽の運行をたよりとすることで問題ないが、しかし場合によっては航海が何日にも及ぶことももちろんあったろう。そうしたときに船の進路をきめるのは、何よりも夜空にうかぶ星（ないし星座）であったはずだ。そしてその星々（星座）は、先にも述べたように、一年を周期として寸分のくるいもなく、天空をめぐるっている。つまり、一年のある決った時期にはかならずある決った位置に一定の決った星（星座）が見られるということなのだ。だからそうした星（星座）の位置を確認し、それを目印にして航海してゆけば、無事に目的地に着けたのである。このように海洋民族にとっては、夜空にうかぶ星（星座）が生活に直結するほどに重要な意味を持ったのであり、そのことから古代ギリシアにおいては星座の命名が発達していったのであって、そしてその命名のほとんどがなお今日に及んでいるほどなのである。こうした星（星座）の位置確認はたしかに空間的な事柄ではあるが、しかしこの星（星座）が一年（という時の移ろい）を周期として天空をめぐるっているののであってみれば、空間意識はそのまま時間意識へと移行され得る。つまりは、これらの星々（星座）が円環をなして永遠にかわることなく運行しているとの空間意識はそのまま、時間もまた同じく円環をなして永遠に移ろっているのだとの、彼らの永劫回帰的な円環的時間観へ移行していても何らおかしくないということなのである。要するに、古代ギリシア人にとって、時間とは円環をなして永劫回帰的にめぐるものだと観られ意識されたのは、彼らが海洋民族だったことがまた一つの大きな要因をなしていたと言いきってよいのではあるまいか、ということなのである。

### 古代ギリシアの農耕にかかわる時間観

以上のように、古代ギリシア人が哲学的に「時間」というものを考えていったとき、時間とは円環をなして永遠にめぐるものという、永劫回帰的な円環的時間観にゆきついたのであったし、また海洋民族としても、航海に必要な不可欠な天体の運行の観察から、同様の時間観をもつにいたったのであった。そして、天体の運行

に準拠するこうした円環的な時間観は、基本的には古代ギリシアにおける農耕の営みにあってもまた認められるところのものである。

農耕はいうまでもなく季節の変化・移ろいと不可分である。その季節の変化は、まわりの自然界の動植物を観察することによっても知られるが、古代のギリシア人はそれを主に天文現象から知ろうとしたものようだ。そうしたことは、前8世紀のヘシオドスの『仕事と日々』のなかの記述からも明瞭にみて取れる。そこでは季節の変化は、鶴やカッコウの鳴き声また蟬の歌声、あるいは地面から樹に<sup>は</sup>適いのぼるカタツムリや燕の飛来といった自然界での諸現象によっても知られるとしながらも、しかしヘシオドスとしては主としてこれを天文現象（天体の運行）によって示している。たとえば「農事暦」の章の冒頭では、アトラスの娘プレイアデス（<sup>すばら</sup>昂星）が天に現れる頃（5月11日）に収穫を始め、これが姿を消し始める頃（10月末）に耕耘（=<sup>こうくわん</sup>種蒔き）し、この星が40夜、40日の間かくれていて、再び姿を現す頃にまた鎌を研ぐというのが、野の掟である（383-8）、といている。そのほか、冬至になって鎌を研ぐようでは多くの収穫は望めない（479-82）とか、ブドウの剪定は、冬至の後60日して、アルクトゥーロス星がオケアーノスの聖なる流れから出て、黄昏の空に燦然と輝きつつ姿を現すようになり、やがて燕が飛んで来るようになってからではもう遅いから、それ以前にしてしまわねばならぬ（564-70）とか、オリオンが初めて姿を現したならば（6月20日頃）、デメテルの聖なる賜—麦の脱穀をせよ（597-9）とか、オリオンとセイリオスが中天に達し、指<sup>ほろ</sup>薔薇色の曙がアルクトゥーロス星の姿を見る頃（9月中旬）には、ブドウの房を残らず摘み取れ（609-11）とか、プレイアデスやヒュアデス（雨星）やオリオンが姿を消す頃（10月末から11月初め）ともなれば、時をたがえず田を鋤き種を蒔くことを思え（614-7）とかと教えている。

このようにヘシオドスは、この書物において直接的には彼の兄弟ペルセウスにむかって、そしてそのことを通してまた当時彼が住んでいたポイオチアの貧しい農民たちにむかって、農業

や航海の心得を説き、日のよしあしを教えようとして、その際、諸々の農事を季節に即応して遅滞なく営んでゆくために、とりわけ天文現象を目印とするよう注意をうながしている。ここで彼が、全体を一年の輪として、つまり晩秋の播種に始まり翌年の播種準備におわる輪として、とらえていることは明らかである。だがしかし、一年の輪・一年のめぐりにおいて営まれてゆく農事において、季節の変化・移ろいを知るために自然現象とか天文現象とかに注意をむけるといったことは、ヘシオドスに言われてみてはじめて当時の農民たちが気付かされたといったようなことだったのである。いやむしろ実際には、当時の農民がすでにちゃんと自然現象、天文現象を自分たちの農事暦のなかに取りこみ組みこんでいたということだったのでなかったろうか。言いかえれば、天体の運行がすでに彼らに身近かなものとして、その生活のなかには織り込まれていたということではなかったろうか。そうした現実・事実をふまえて、それをヘシオドスが詩文の形に美しくまとめあげたというのが実際だったのでなかったろうか。……それはともかく、農事とは一年の（季節の）めぐりにおいて営まれるものである。そしてその営みが一年周期でめぐる天体の運行に準拠してなされるものであってみれば、農事にかかわる時間観は、とはつまりは古代ギリシアの農民の時間観は、一年周期の円環的時間観であったことだろうし、そしてこの一年周期の円環が数珠つなぎにあるいは螺旋的につらなりながらつづいてゆくと観るところのものであったろう。

ただししかし農民たちの日々の生活における「時の円環」は、実際にはもっと小さな月の満ち欠けによる1ヶ月周期のものであったようである。というのは、『仕事と日々』の最後の部分（746-828）で、日のよしあしを教えているのだが、そこでの日の数え方は例えば、月が段々大きくなってゆく場合の8、9の両日は人間界の仕事によく、11、12の両日は羊の毛を刈り、畑の稔りを刈り取るのによい、月の13日は播種は避けた方がよいが、植樹にはよい等々といった具合に、日が月の満ち欠けによるひと月周期の「時の円環」を基準にして数えられていることは明らかだからである。そしてこのひと

月のめぐりの円環的時間観もまた、ヘシオドスに教えられるより以前に農民の日常生活にあってすでに一般化していたと見なすのが妥当であろう。

このように見てくると、古代ギリシア人における円環的時間観の内実を次のように言いなおすことができるでもあろう。……彼らの日々の生活では、まずは月の満ち欠けによるひと月周期の「時の円環」がある。次に、このひと月周期の円環が数珠つなぎに12個ほどつながってより大きな一年周期の「時の円環」を形づくる。そうして次にはさらに、この一年周期の「時の円環」が数珠つなぎに何百、何千とつながってひとつの宇宙的スケールの「時の円環」となる。この宇宙大的な円環的時間は永劫回帰的にぐるぐるめぐるやむことがない、とされるのである。そしてこれら三つの「時の円環」をこのように関連づけ得るとするならば、一般に言われるところの古代ギリシア人の永劫回帰的な円環的時間観も、哲学的にはたしかにそのようにコスミックな時間にまで発展拡大されていったにもせよ、しかしその内実は、実際の農民の生活に直結したそれよりはるかに小さなひと月周期また一年周期の「時の円環」ないし円環的時間観を内的なささえとするとところの、三重構造的な時間観であったとするのが妥当な見方ではあるまいか。

なおついでながら、ヘシオドスは『仕事と日々』のなかで「航海について」も述べていて、そこで彼は、航海は一年の季節のめぐりにおいて安全な時期をえらぶようにと警告している。すなわち、夏至のあと50日間がもっとも安全であるが、やがてブドウの取り入れが行われて、新酒ができ、秋雨が降るようになれば、航海は危険となる。大浪のさかまく冬をやりすごしたあと、春もまた海を渡る季節となる。がしかし春の航海は夏ほど安全ではない（663-694）、と。ヘシオドスの警告は主として海外貿易者にむけられたものだが、そこでもみるかぎりでは、海洋民族としてのギリシア人にとっての海洋での時間も、時（時期、時節）が自分たちの生命の安危にかかわるものとして、実際にはより現実的な一年周期の円環的時間観であった〔季節によって海に出れないとき、船乗りたちは農民

となる、ということにおいてもこれは当てはまる)と見ることが出来そうである。

### 古代ギリシアにおける牧畜

ところで、これまで見たところでは、古代ギリシア人における時間イメージは——一般にそう思われているのだが——時間とは円環をなしてめぐるものという円環的時間観であったと言えそうである。しかし、たとえこの円環的時間観が彼らにあって支配的であったにしても、彼らの時間観は決してこれひとつにつきるものではなく、他の時間観もまた同時並行的に存在したということ、筆者としては強調したい。たしかに、ヘシオドスはその著『仕事と日々』のなかで、餓えをしのげるよう神々がわれわれに与えたもの、それが仕事であったとしたその仕事とは農耕であった。そしてこの農耕という厳しい労働を少しでも容易にするために、耕耘用の家畜として牛や騾馬を飼育することが勧められている。そのかぎりにおいては、家畜の飼育は農耕の補助手段(その糞尿が大切な肥料になるという意味においても)であって、それにとりまなう時間イメージないし時間サイクルの点でもまた、農耕における一年周期の円環的時間観に組みこまれるものであったろう。しかしながら、家畜が当時たんに農耕の助け手としてのみ飼われていたのではないことは、『仕事と日々』のなかの記述からも、ただちにかつ容易に理解される。すなわち農耕と並行して、あるいは農耕とは別に、牧畜(業)もまた、とは家畜の飼育それ自体を目的として、営まれていたということだ。それはひとつには乳を飲み物または乳製品とし、肉を食料とするためであった(肉としては特に豚が好まれた由)のだが、しかしまた羊(古代ギリシアでは重要な用畜として飼われていた)のごとくにその毛のほうが目撃的であったりもした。同著からあえて二、三引用すると……「人間は労働によって家畜もふえ、裕福になる」(308)、「レーナイオーンの月——来る日も来る日も、牛の皮を剥ぐ辛い日々だが——」(504)、「北風は馬を養うトラキアを貫け」(507)、「北風は牛の皮も吹き通す、その皮も風を防ぐことはできぬ。また毛長の山羊も

吹き抜けるが、ただ羊のみは、その豊かな毛のゆえに、さすがに強い北風も決して吹き通すことはない」(515-7)、「乳入りの麦菓子と哺乳をやめた山羊の乳、まだ仔を産まぬ放し飼いの牛と、初仔の小山羊の肉が欲しいものじゃ」(590-2)、「11日、12日の両日は羊の毛を刈り」(773)等とある。

ここに見るとおり、ヘシオドスの時代にはすでに牛、馬、山羊、羊といった牧畜用の家畜はすべて飼養されていたわけだが、たとえば家畜としてのみならず戦争においても重要だった馬が、ヨーロッパが原産地でないことは考古学的にも証明されている。それなら、こうした家畜はどこからやって来たのかということになるが、そのさい家畜のみが歩いてやって来るといったことはあり得ないのだから、ギリシアへの民族移動と共にもたらされたものとするしかない。そしてこうした家畜の原郷と、そうした家畜に依拠しながら生活していた民族の原郷へとさかのぼってゆくと、それは東欧の東側とウラル山脈の西側との間の草原地帯に住んでいた遊牧ないし牧畜民族たる印欧(祖)語族(インド・ヨーロッパ語族)にゆきつく。この遊牧ないし牧畜にたずさわる民族の時間意識が、時間とは過去から未来にむけて直進してゆくとする直線的時間イメージのものになることについては一般にも認められているし、筆者もまたこれまでに述べたところなので、ここではくり返さない。ともかくこの印欧(祖)語族が、紀元前2000年頃に三つに肢分かれて、その一派がアルメニアからインドへ、もう一派がゲルマンの地へ、そしてもう一派が地中海方面へと移動していったこともまたよく知られている。ギリシアが世界史のなかに登場するのも、およそ前2000年の頃ヘラスの地にこの印欧語族=遊牧ないし牧畜民族(部分的には農耕も営んだので、正確にいうと半遊牧ないし半牧畜民)が北方より侵入・来住してからである。そして前1600年頃には各地で強力な軍事支配者となって次第に海上にも進出し、先進文明であるクレタ島を中心とした文化を摂取して、ミュケナイ、ティリンスを中心にいわゆるミケーネ文明をつくる。他方、クレタ島でさかえていたミノア文明は、前1350年前後を境にして、再度起った大地震と

本土のギリシア人の侵攻によって急速に衰退していった。このミノア文明とミケーネ文明を合せてエーゲ（海）文明とよぶこともあるが、いずれも農耕（＝円環的時間意識）を基盤とする社会であった。ただし後者では、そのうえに牧畜民族（の直線的時間意識）がおおい重なる形で出来あがった文明だという違いはあったのだが。

このあと前1200年の頃、再び民族移動がおこり、〔その直接の原因は当時の気候の悪化にある、と安田喜憲氏はその著『気候が文明を変える』の中で指摘している〕この第二次の侵入者（ドーリア人）がミケーネ文明を破壊する。この新しい侵入者は言語によって西方方言群ギリシア人として先住の東方方言群ギリシア人と区別される。本来は狩猟民族であるが、この頃には遊牧・牧畜民となっていたらしい。この西方ギリシア人がギリシアの北西部、中部、ペロポネソス半島を占住し、東方ギリシア人はこれに隷従するか、西方小アジア沿岸に逃れてアイオリス、イオニアなどの植民地を拓いた。この混乱期をへて、前8世紀末以降ポリスが成立し各部族の政治的統一がすすんで、アナトリア、クレタに代表される先住者の母系社会を反映した母宗儀を、北方的な父宗儀が圧倒した形でオリュンポス国民宗教が成立する。これはゼウスを父・君主とする12の男女神と、その他の勢力の劣った神々の崇拜として知られる。そうして農耕（民族）に特徴的な地母神崇拜、母宗儀、多神教を、牧畜（民族）に特徴的な天空神崇拜、父宗儀、一神教へと収斂さそうとする努力がなされて、やがてはゼウス、アポロン、アテネの三位一体、さらにゼウスの最高神化が見られるようになった。

#### 古代ギリシア人における多元的な時間観

上述のことをいま時間観の側面から言いなおすと、それまでの農耕に特徴的な円環的時間観を、あらたに侵住した牧畜に特徴的な直線的时间観が、克服・征服し、みずからに一本化しようとする努力がなされたということになる。しかしながら時間観というものは、これまで幾度となく述べてきたように、いったんその民族に

成立・定着したならば決して消え去ることがないとの特性をもっている。融合、併合、一体化などはないのだ。だから単純化していえば、そのときどきに優勢になった時間観のほう前面に出てきて、劣勢な時間観は背後にさがるまでのことである。それに、古代ギリシアでは直線的时间観の優勢化への努力により、ゼウスの最高神化がはかられはしたが、しかしそれはユダヤ教やキリスト教に見られるあの唯一絶対の最高神ヤーヴェの比ではない。所詮は、表向きゼウスを最高神としてあがめるところの多神教でしかないことは、ギリシア神話からも明瞭である。たしかにヘラスの地に來住・占住した牧畜民族が政治的あるいは宗教的には先住民族を支配したにしても、そしてその後も地域的には彼らの導入した牧畜が継続して営まれていったにしても、しかしギリシア全土の気候風土からいって、（つまり夏期の乾燥の激しいギリシアの地は、基礎飼料として生草が必要な牛や馬の飼育は容易ではなかったから、）全体としては農業を生産の基本とするほうがはるかに安定していたのだった。そのうえ「BC9世紀ごろから、鉄器の使用が普及してすぐれた農具・武具が生まれ、それによって人口が増大し、…また、余剰産物ができ、交易が可能になる…加えて定住化がすすみ（したがって農業が牧畜をしのぐようになり）、都市を中心に周辺村落を併合した「集住（シェノイキモス）」も進行する。」<sup>9)</sup>（傍点筆者）人口の増大によって農業生産が拡大する一方、鉄製の斧の登場により、森林地帯を開墾してブドウ畑やオリーブ畑に転換することが可能となる。それによりワインと油の生産は拡大し、余剰生産物を生んで輸出も可能となる。と同時に過剰人口をまかなうために海外に土地を求め動きを促進したのだった。植民活動のはじまりである。

ともあれ、こうしたことによって結局のところ古代ギリシア人の時間イメージ全体としては、先にも述べたように、農耕に依拠する円環的時間観のほうこそが支配的となったのである。これを言いなおせば、表向きの政治や宗教における支配的立場とは違って、直線的时间観のほうが実質的にはむしろ従の関係にあったということになる。ただこのことから明らかなように古

代ギリシアにあっては、一般に言われているとは違って、ひとり〔永劫回帰的な〕円環的時間観のみならず、それと同時に並行的に直線的时间観もまた存在していたということであって、そのことをこそ筆者としては強調したいのである。そしてなおまたこのことから明らかなように、古代ギリシア人は、原初的あるいは基層的な時間観としては「時とは反復的にくりかえすもの」ないしは「時とはジグザグ運動の形で経過してゆくもの」というイメージを持っており、そうしてその後の農業文明の確立にともなって円環的時間観が支配的となっていたのではあるが、同時に牧畜にともなう直線的时间観もまた保持していたということにおいて、多元的な時間観（ポリクロニック・タイム）の民族だったのである。

### 古代ギリシア人の植民活動

このような多元的な時間観のギリシア人が、紀元前8世紀前後から当時の人口増加を直接的な原因として植民活動にのりだし、その一環として南イタリアおよびシチリア島（シチリア）に多くの植民市を建設して定住していったとき、当然のことながらそれに伴って彼らの多元的な時間観もまた同時に定着して、やがてはそこから古代ローマ人（古代イタリア人）のあいだへと、そしてさらには地中海沿岸のラテン系民族全体のあいだへと、侵透し拡まっていったのであった。

これをもう少し具体的に言うと、ギリシア人の植民活動は二つの時期に分かれて行われた。第一次の植民活動は、紀元前9世紀の終りから前8世紀のはじめにかけてなされ、植民先はもっぱら小アジアの西岸に集中していた。つまりこの時期の植民の範囲は、ほぼケーゲ海域に限られていたといつてよい。ところが第一次からおよそ半世紀をへた、紀元前8世紀の半ば前後になって行われた第二次の植民活動では、植民の範囲は全地中海に広がった。ギリシア本土のギリシア人の入植が最も盛んであったのは何といってもギリシアに近い南イタリアおよびシチリアであって、ほんの2、3を例示すれば、アテネ人が建設したナポリ、スパルタ人が建て

たターラント、コリントからの入植者が建設したシラクサをはじめとして、総称して「マグナ・グラエキア」（大ギリシア）と呼ばれるくらいに多くの植民都市が建設された。そして彼らの植民活動はさらに遠く、西はフランスからスペインに達した。スペインのマガラもフランスのマルセイユもこの時期のギリシアの植民都市を起源としている。そのようにしてギリシア人の多元的な時間観が入植されていったわけだが、そのことが後に古代ローマ帝国の版図拡大に伴って、なおさらに多元的な時間観が地中海沿岸ラテン系民族へとひろがってゆく下地の役割をも果たしたのであった。

### 註

- 1) フェルナン・ブローデル：「地中海世界——空間と歴史——Ⅰ」（神沢栄三訳、みすず書房、1991）（以降、ブローデル、と略す）フェルナン・ブローデル：「地中海Ⅰ 環境の役割」（浜名優美訳、藤原書店、1992）、（以降、ブローデルⅠ、と略す）を参照。
- 2) ブローデル、S. 17-19
- 3) 前1万年頃に始まった狩猟生活から農耕生活への転換が、旧ヨーロッパ世界に広まったのはおよそ前8000年頃である。農業はまず《肥沃な三日月地帯》で発生し、少しずつヨーロッパに普及していった。そして前6千年紀、南イタリアについて、南フランスやスペインでも穀作が始まった。栽培された穀物の種類は地域によって異なっていて、この時代では、たとえば小麦は、南フランスでは中心的な作物だったが、南イタリアではまれにしか作られなかったといったことなども分っている。このように農耕の営みに関してはかなり古くまでさかのぼってゆけるのではあるが、しかしそのさいの時間意識となるとあまりに漠としてくるので、問題にしている時間観の点では、やはり農業文明の確立していった時代あたりから始めざるを得ない。
- 4) 岩片磯雄著：「古代ギリシアの農業と経済」（大明堂、昭和63年）S. 55-56 参照。（以降、岩片、と略す）
- 5) 岩片氏はその著「古代ギリシアの農業と経済」のなかで、ブドウとオリーブの地中海沿岸への導入はもっと早い時期までさかのぼれるとして次のように述べている。「ギリシアにブドウとオリーブが栽培作物として登場したことが確認されるのは、およそ前2500年ごろで、後期石器時代ないし初期青銅器時代である。以来オオムギ・コムギ・ブドウ・オリーブが

- 古代ギリシアの代表的作物となり、これらが合体して地中海型環境のもとでの自給的・複合的経営の支柱となったのである。」(42頁)
- 6) O.クルマン：「キリストと時」(前田護郎訳、岩波現代叢書、1954) S.36-37 (以降、クルマン、と略す)
- 7) ミルチャ・エリアーデ：「聖と俗」(風間敏夫訳、法政大学出版局、1976) S. 102-103、(以降、エリアーデ、と略す)
- 8) 真木悠介：「時間の比較社会学」(岩波書店、1986) S.167-8
- 9) ビエール・レベック：「ギリシア文明」(田辺希久子訳、創元社、1995) S.64